

日本列島における都城形成(二)

—近江京の復元を中心にして—

阿 部 義 平

はじめに

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1 倭の外に営まれた宮都 | 4 近江京の全体構成の復元 |
| 2 近江京の追求 | 5 難波京についての若干の検討 |
| 3 近江京の方格地割の復元 | 6 近江京からみた宮都の展開 |

論文要旨

東アジアの古代国家の権力中枢は都におかれた。その都は、理念に基づく多様な構造物と厚い都市城壁で囲まれた都城として制度化されていた。日本列島で中央集権国家が形成されるのは7世紀以降であり、10以上の都の変遷が知られている。その都は、日本の都市の通例に漏れず、実効的な都市城壁を持たなかったというのが定説である。7世紀末以降の都は、条坊制と呼ぶ方格地割に基づく計画都市として造営され、外国の使節が通る中軸線上の朱雀大路の周辺には門や城壁が築かれるが、それも国際交流が衰退すると維持されなくなるといわれてきた。都城としての不充分さが指摘されてきたのだが、防備の施設を含めた都城の実態はどうであったか。小論は、先に九州の大宰府の羅城を中心とし検討を加えた続篇として、日本都城の実態や防備の実効性の把握を試みた。防備面では、中国都城の都市城壁の方式の他に、朝鮮半島の山城を防備の核とする都城も知られ、日本でも環濠集落や首長層の居館の伝統も存在した。大宰府では7世紀後半代に山城と羅城を組合わせ、方格地割の条坊をもつ大規模な都市が成立していた。畿内の倭の都でも、7世紀後半代には山城などを追加し、都市改造も行った形跡はあるが、その実態は明瞭ではない。畿内の地域の東に接する近江に営まれた近江京は、短期（667～672）の都であった。そこには琵琶湖の西岸の南北5キロメートルをこす方格地割された狭長な都市域と、その西の山中に最大の規模をもつ抱谷式山城を構え、それと一連の防備ラインと施設をもった都城であったことが復元される。近江京の方格地割は、地理学的方法で復元が提示されるに止まるが、同様な規格での地割方式の遺構が、先行する難波京でもごく一部で発掘されている。7世紀後半代の日本には、山城などを伴う本格的都城の時代があったことが実証される。